

平成 28 年度幼児児童生徒の文化・スポーツ活動の足跡

表彰

<国語科>

第 34 回九州地区盲学校弁論大会（熊本大会）

中学の部 優良賞 中学部 3 年 藤岡まい

第 13 回公徳文芸賞

肥後狂句の部 努力賞 高等部普通科 3 年 上妻七海

短歌の部 努力賞 高等部普通科 3 年 上妻七海

第 44 回少年少女俳句会

高校の部 佳作 高等部普通科 3 年 上妻七海

<美術科>

平成 28 年度障害者雇用支援月間ポスター

絵画中学校の部 理事長奨励賞 中学部 3 年 藤岡まい

<スポーツ・部活動>

第 9 回全国視覚障害者学生柔道大会（柔道部）

73 キロ 81 キロ混合の部 優勝 高等部専攻科 2 年 片山孝佳

66 キロ以下級の部 2 位 高等部普通科 2 年 桑野真弥

全国障害者スポーツ大会（陸上競技部）

100m 25 クラス 12 秒 24 金メダル 高等部普通科 3 年 松永惇希

ソフトボール投 25 クラス 77m 29 銀メダル 高等部普通科 3 年 松永惇希

<その他>

平成 28 年度熊本県がんばる高校生表彰

高等部普通科 3 年 松永惇希

部活動

1 柔道部

活動は主に火曜日から木曜日の放課後の時間帯に柔道場で行っている。部員は、高等部生 2 名が在籍し、それぞれの目的・目標に応じて行っている。

【大会等】

今年度は、全日本視覚障害者柔道大会、全国視覚障害者学生柔道大会の 2 つの大会に出席した。

第 31 回全日本視覚障害者柔道大会

11 月 27 日（日）東京講道館で行われた。53 名の選手が出場し、男子 7 階級、無段者の

部、シニアの部、女子2階級に分かれて試合が行われた。今年の大会は昨年同様、海外からの参加を募り、韓国、カナダ、ルーマニアらの参加者があった。本校からは高等部専攻科理療科2年の片山が出場した。

【結果】

○片山孝佳（81キロ以下級）1勝2負（予選リーグ敗退）

片山は昨年より1つ階級を上げて81キロ以下級に出場した。この階級は7名の選手がエントリーしていた。試合は、まず2つのリーグに分かれてリーグ戦を行い、その後、上位2名での決勝トーナメントを行う。片山は3試合を行い1勝2負だった。リーグでは3位となり決勝トーナメント進出はならなかったが、昨年できなかった1勝をあげることができた。1勝1負で迎えた3試合目、序盤、ポイントをとってリードする場面があったが、終盤に逆転を許し敗れた。積極的に技を仕掛ける攻撃的な試合を展開していたが惜しくも決勝トーナメント進出はならなかった。

第9回全国視覚障害者学生柔道大会

12月23日（日）滋賀県立武道館にて全国視覚障害者学生柔道大会が行われた。前日には、計量、合同練習、情報交換会が行われ選手同士の交流が行われた。大会は個人戦、その後、練習試合が行われた。練習試合を含めて桑野は3試合、片山は4試合することができた。2人とも試合前の緊張感を感じながら試合に挑み、試合を重ねるごとに本来の実力を発揮できていた。同じくらいの年代の人たちと試合をすることができ、良い刺激になったと思う。

【個人戦結果】

○片山孝佳（73キロ・81キロ混合の部）（1位）

同じ階級に出場者がおらず、1つ下の73キロ以下級に1名のエントリー者がいたため合同の部での試合が組まれた。だが、直前にその選手が欠場したため不戦勝という形で優勝が決まった。

○桑野真弥（66キロ以下級）（2位）

66キロ以下級は2名の参加だった。試合前とても緊張している様子が見られた。試合は序盤に背負い投げで「有効」を取られ、続けざまにかけてきた相手の技を返そうとして体を押し込まれて一本負けをした。緊張で体が思うように動かず本来の力が発揮できなかった。

【練習試合結果】

今回は大会全体の参加者が少なかったため試合経験をさせるため練習試合が行われた。

○片山孝佳（2勝2負）

4試合を行い2勝2負だった。3試合が90キロ以下級の選手、1試合は66キロ以下級の選手との対戦だった。2勝したのは90キロ以下級の選手だった。試合を重ねるごとに力みがなくなり最後の試合は見事な「大内刈り」で一本勝ちをおさめた。

○桑野真弥（1勝1負）

2試合を行い1勝1負だった。2試合とも60キロ以下級の選手と対戦だった。この選手は今回の60キロ以下級で優勝した選手だった。年齢も桑野と同じ年である。1試合目は「内股」で一本負けをした。頭を下げて体を丸くしたところに攻められてのものだった。

2試合目は序盤から技をかけにいく積極的な様子が見られた。「払い腰」で「有効」を奪い、相手が焦って技を出したところを返し技で寝技に持ち込み、抑え込み一本勝ちをした。

2 サウンドテーブルテニス部

今年度は、熊本地震の影響で多くの大会が中止になった。そのため、来年度の大会に向けての練習に取り組んだ。卓球台やその他の用具も壊れることなく、練習がスムーズに行えた。

3 フロアバレーボール部

今年度は大会がなく、来年度の九州地区盲学校体育大会フロアバレーボール大会（以下、九盲体）に向けて2学期から練習を行ってきた。

来年度からフロアバレーボールは、全国大会が実施されることになり、九盲体で優勝すれば全国大会に出場できるため、優勝目指して活動している。

4 陸上競技部

小学部2名、中学部1名、高等部3名、計6名で活動している。各々の目的や目標に合わせ、トレーニングをしている。小学部は月水金16時から17時まで、中学部・高等部は平日16時から18時まで、土曜日9時から12時までの時間帯で行っている。

【出場するクラスについて】

○国際クラス分け基準で開催される大会

T11 視力が0.0025未満

T12 視力が0.0025以上0.032以下、およびまたは視野半径5度未満

○全国障害者スポーツ大会（日本国内独自の「障がい区分」）

25 視力手動弁から0.03まで、視野5度以内

平成28年度熊本県パラスポーツ強化指定選手・育成ランク

高等部専攻科1年 河野マリナ 100m (T11)

高等部普通科3年 松永 悠希 100m (T12)

平成28年度日本パラ陸上競技連盟育成指定選手

高等部普通科3年 松永 悠希 100m (T12)

ジャパンパラ陸上競技大会（6月4日・新潟デンカビッグスワンスタジアム）

高等部専攻科1年 河野マリナ 100m (T11) 記録なし

高等部普通科3年 松永 悠希 100m (T12) 12秒76

全国障害者スポーツ大会（10月22日～24日・岩手県北上陸上競技場）

高等部普通科3年 松永 悠希 100m (25) 12秒24 金メダル

ソフトボール投 (25) 77m 29 銀メダル

5 グランドソフトボール部

平成 28 年度九州地区盲学校体育大会

第 28 回グランドソフトボール大会（鹿児島大会）

期日：7 月 6 日（水）～8 日（金）

場所：鹿児島ふれあいスポーツランド

成績：熊本、大分合同チーム 第 3 位

結果（トーナメント）

1 回戦 2-1 対福岡県立北九州視覚特別支援学校

2 回戦 0-9 対福岡県立福岡高等視覚特別支援学校

6 スポーツ障がい研究部

今年度は、3 名の部員を中心に毎週 1 回、放課後の時間を使って活動をした。

主な実施内容として、ストレッチング、スポーツマッサージ、スポーツテーピング、アイシングについて行った。

本年度は、熊本地震の影響で毎年行われているスポーツケア研修を実施することが出来なかったため、次年度の参加に向け、知識・技術の習得を目指して活動した。

7 アンサンブル部

第 49 回 熊日学生音楽コンクール 管・打楽器部門 出場

期 日 平成 28 年 11 月 12 (土)

場 所 熊本市アスパル富合

曲 目 「フィドル・ファドル」(L. アンダーソン作曲)

出 場 者 藤岡まい（中 3）

初めての試みとして、コンクールに参加をした。普段はアンサンブルに親しんでいるため、独奏は部員にとって大きなチャレンジだった。予選通過とはならなかったが、審査員の先生方からは今後を期待する評価をいただいた。すでに次の挑戦に向けて、日々の練習に励んでいる。

平成 28 年度 アンサンブル部部員

上妻七海（高 3）、藤岡まい（中 3）、土田楓士（小 6）、田中桃華（小 5）

昨年度からメンバーが減り、全体での演奏会等は実施することができなかったが、次年度に向け、基礎練習や小学生を含めた楽曲練習に年間を通して取り組んだ。楽曲は、「FOOLISH GUYS」(ヒダノ修一作曲) という和太鼓を含む打楽器アンサンブルの曲で、小学生部員 2 人が和太鼓パートを担当した。さまざまな感覚をフル活用することで、全曲を通して演奏することができるようになり、大きな達成感が得られたようだ。

次年度は、九盲音楽大会が控えており、全員で「グランプリ」受賞を目標に掲げている。

「平成 28 年熊本地震」についての報告

1 学校の被災状況「事務室から」

盲学校の校舎及び寄宿舎内は、本棚や書類保管庫等が倒壊したものの、施設自体に深刻な被害はなかった。軽微な破損箇所については、学校再開の 5 月 10 日までには概ね補修が完了し安全に使用できる状況に復旧できた。

体育館は、天井から屋根材を固定する金具の落下が確認されたため、安全が確認されるまで使用を禁止していたが、6 月 17 日までに応急措置を施し、6 月 20 日からは通常利用が出来るようになっている。

武道場は室内にはほとんど被害はなかったが、外壁の一部が破損し落下しているため、周辺エリアへの立入りを制限していた。2 学期には復旧できた。

2 地震後の子どもたちの様子「保健室から」

体育館の隣にある保健室もあの地震で本棚は倒れガラスは散乱しひどい状況にあった。

学校再開当初は、頻回な余震や大規模災害後の様々なストレスが予想された。それは子どもだけでなく大人も同様である。実際には「夜眠れない」「泣くことがある」「一人になるのが不安」「イライラする」「なんとなく落ち着かない」等の不安症状、服薬内容を変えた人もいた。生活環境の変化や受診ができるにくい状況から皮膚や眼の症状、低血糖症状やてんかん発作が日頃より起きやすくなつたと身体面でも症状が現れていた。また、メディア情報に敏感だったり地震の話を繰り返したり、話題の中心が地震だったように思う。

ただ、このような反応は誰にでもある反応である。(反応の強さや表れ方は人によって違うが。)「誰かに話を聞いて欲しい」という訴えや気になる幼児児童生徒については、担任や養護教諭でタイミングを図りながら話を聞くようにしながらも、日常が繰り返されることで、少しずつさまざまなストレス反応が少なくなつてきている。

これまでにあった大規模災害の教訓からも、年齢に応じた対応を心がけ、遅れて発生するストレス反応や 1 年後などの節目となるタイミングでストレス反応がぶり返したりすることもある。長期的に経過を見ていく視点と家庭、専門家、医療機関との連携を図りながら、災害時の備えを進めていくことが、子どもや学校だけでなく、自分自身を守ることにつながるのだと考える。

3 熊本地震における視覚障がい者の状況と必要な支援について

高等部 黒木明吉

1 はじめに

本年度が始まってわずか2週間の平成28年4月14日、そして16日、本校が立地する熊本市東区に隣接する益城町を震源として、熊本県民ならず日本中が経験したことのない大地震が発生した。震度7の激しい揺れが2回、それだけでなく、震度6級の大きな揺れが何度も何度も繰り返し襲ってきた。不幸中の幸いと言うべきか、本校幼児児童生徒、保護者、職員等に大きな人的被害はなかった。将来の視覚障がい教育関係者がこの年を振り返ろうとした時、少しでもこの地震のことが理解できればと考えこの稿を執筆することとした。

2 私自身の被災体験

ジブリのアニメ「風の谷のナウシカ」のラストシーンをご存じだろうか。蟲の目が攻撃色の赤から、怒りの静まりと共に青く変化し、周り一面が青一色に変わって行くシーンである。5月5日の「熊本日日新聞」の一面に掲載された益城町の上空写真はまさにこれであった。勿論、青色の点は蟲の目ではなくブルーシートをかけられた家屋の屋根である。

今回の熊本地震では、阪神淡路大震災や東日本大震災においても支援経験のある日盲委、日盲連を始め多くの方々に御支援を頂いた。視覚障がい者をはじめ障がい者は災害弱者でもあり、こういった支援は本当にありがたいものであった。

私は震源の益城町に居住しており、被災状況は半壊であるがとりあえず住める状態である。自宅から前震の震源地は南に4～5km、本震は北2～3kmであった。自宅の敷地内には幅4～5cmの亀裂が2本できており、隣の家との境を越えて走っている。玄関先のコンクリートの階段はぼろぼろに壊れ、外壁には多くの亀裂が走り、室内の壁にはタンスが暴れ衝突した痕跡が多数ある。被災建物の数が多く業者が捕まらないため、自力で修理して住んでいる。

4月14日夜、前震が発生した。21時26分のことである。M6.5、深さ11km、震度7の激しい揺れであった。

そのとき私は2階でテレビを見ていた。CMになりトイレへ向かった。ドアを開けて足を踏み入れたとたん激しい揺れが始まった。家のきしむ音、家具の倒れる音、食器やガラスの割れる音、家族の悲鳴、携帯エリアメールのけたたましい警報音、町内緊急放送とサイレンの音…。揺れている間何が起こったのか全く分からなかった。つかまり立ちするのが精一杯で机の下に潜るなど、とうてい無理な状況であった。地震と理解するのにしばらくかかったほどである。

揺れにより断水と停電になったが、電気はすぐに復旧した。心配してくれた親戚や知り合いから電話やメールがあったが、対応できる状況ではなかった。

動ける状態になったとまず何を行ったか。家族の状況確認、周りの様子確認、水の調達である。小銭を持って暗闇の中近くの自動販売機に走った。余震の揺れにより防犯ブザーが鳴り響く自動販売機からどうにか5本のペットボトル飲料を調達することができた。人々は公園に集まっており、道路に亀裂、家や塀の崩壊、まるでパニック映画の1シーン

を見ている様であった。

近くのコンビニで、アルバイトの大学生が怪我をして救急車で搬送された。周りに居合わせた人が、コンビニのドアを外側から傘等を使って封鎖し、中に入れないようにしていた。そういった配慮もあってか店の商品を持ち去る人もおらず、日本人のモラルの高さを改めて感じた。

その夜は自宅の廊下にクッションを敷き詰め一晩を過ごしたが、大きな揺れが続き、まったく眠ることが出来なかった。

明けて 15 日、この日の地震回数は 224 回であった。ラジオの情報では「向こう 2 週間は、震度 5 程度の余震が続く恐れがある」ということであったが、食料も 2 ~ 3 日分あつたので避難せずに家で過ごすことにし、食事をするための台所と今夜寝る場所を確保した。

その日は報道ヘリが益城の上空を飛び交い、町内の緊急放送が全く聞こえなかった。情報収集が出来ないことと、騒音でとても腹が立った。報道関係者は今後、災害の際には是非考えて取材をして欲しいものである。

トイレ用の水の調達に、家のペットボトルを集めて 500m 位離れた所に湧き水を汲みに行つたが、地震で水が混濁していて飲めそうになかった。今回の震災では湯船の水が、トイレ用として役に立った人が多かったようである。

15 日の夜は昨晩と同じ場所、一階廊下に妻と子供が、二階に私が休むことにした。

私は寝る前に益城町の視覚障がい被災者としてラジオ取材を受けたが、まさかその数時間後に再び震度 7 の大地震が起こるとは夢にも思っていなかった。

4 月 16 日、本震。1 時 25 分、M7.3、深さ 12 キロ、震度 7。

益城町は、二晩続けて 2 回も震度 7 の地震を受けてしまった。後で知ったことだが 16 日は、地震回数 1223 回だったそうだ。1 日は 1440 分なので、ほぼ 1 分に 1 回揺れていたことになる。

昨日より明らかに激しい揺れであった。蛍光灯が割れ私が寝ている頭上に降って来た。激しい心臓の鼓動、停電、ガスの臭い。揺れが小さくなるのを見はからって家の外に逃げ出した。私は起震車で震度 7 を体験した事があるが、今回の揺れはその比ではない。震度は 7 までだが、あれは 8 とか 9 で良いのではないだろうか。



神楽神社(益城町広崎) 前震で持ちこたえた櫓(左)も本震で倒壊してしまった(右)

道路が凸凹で車での避難は危険と判断し、暗がりの中、近所の人々と安全な場所に固まって夜が明けるのを待った。やむことなく地響きが続き、家、電柱が倒れるのではと不安

な時間が続いた。

深夜2時頃、上空に戦闘機が2機、轟音を響かせながら飛んできた。福岡基地からの自衛隊機スクランブル発進だったと後で知った。

明るくなるのを待って緊急支援物資施設となっている産業展示場グランメッセに行ったが、壁やガラスが損壊しており、ビー玉大のガラスが散乱、水道管も破裂し、緊急支援の拠点として全く機能していなかった。1時間ほど並んでやっと1家族に500mlのペットボトルのお茶が2本もらえただけであった。

益城町では本震後、地震計と町内放送が故障したため、益城町の震度情報が全くなかった。そのせいか報道ヘリも他の被災地に取材に行ったようで、昨日とはうってかわり静かな一日となった。

16日は学校に避難し一夜を明かしたが、17日には、家族を比較的無事な妻の実家に避難させることにした。私は職場が遠くなることもあって家に残ったが、近所の人々は学校の運動場等で車中泊しており、心細い数週間を過ごした。夜は家で一番安全な場所、天井が落ちてこない場所を考え、洗面所にねぐらを確保し過ごすことにした。室内にいるとまず地響きがあり、その後に揺れが来る。屋外ではまず木々が揺れ、その後に地震が起きた。今思うと自分でもよく頑張ったなと思う。

プロパンガスは翌日に復旧したが、電気の復旧は、5日後であった。火事を防ぐため、ブレイカーを落としていたので、片付けながら安全確認し、問題の無い部屋から電源を入れて行った。自宅がある地域の水道は2週間後に復旧した。ただ、我が家では敷地内で水道管が破裂しており1ヶ月以上断水状態となり、しばらくは、体を拭くだけの日々となつた。

震災後1週間は雨天が続いたので、バケツに雨水をためトイレ用の水として利用した。又、500mほど離れた所にある湧き水汲みが朝夕の日課となつた。水節約のため、小便は敷地内的一角に…。男一人だったのでどうにかなつたのだと思う。公民館に仮設トイレが設置されたのは発災から1週間後のことだった。

食料は、配給と知人の差し入れ。宅配便是業者が、益城町行きは受け付けていなかったため、職場や実家に送ってもらった。飲料水は、自衛隊の給水車と配給のミネラルウォーターであった。

夜はポケットに携帯と懐中電灯を入れて就寝した。枕元には避難用リュックと靴を置き、避難通路を2つ確保した。現在でもこの習慣は続けている。



亀裂により通行止めとなった道路(左)



倒壊した塀で通れなくなった道路(右)

強盗が多発しているという噂がたっていたので、防犯のため室内を電池式のライトで明るくして夜を過ごした。又、情報収集のためラジオのニュースは聞いたが、ネガティブにならないようワイドショー等の被災地画像は極力見ないようにした。

3 益城町の被害状況

益城町の被災状況を記す。

避難者数、4月17日、1万6050名、総人口約3万5千人。

この数は、避難所で把握された数である。車中泊、敷地内のカーポートやビニールハウス等で過ごした人もいたので総数はまだ多かったはずである。

人的被害 死者23名 重軽傷128名

家屋被害 全壊2714件 大規模半壊778件 半壊2131件 一部損壊4558件

合計1万181件(9月15日現在)。

3月現在の世帯数は、1万3455世帯だったので、8割近くが、何らかの被害を受けたことになる。

九州の家は台風対策を考えて造られており、瓦屋根が多く頭が重いとのことである。私も家を建てる際、水害の事は考えたが、地震の事は全く考えなかった。周りに目を向けると倒壊した家が、車道や歩道を塞ぎ、道路はメビウスの輪の様に波打っていた。道路は渋滞し、普段なら車で20分程度の道のりが2~3時間かかることも珍しくなくなった。

私が配給で、お世話になった益城保険福祉センターは多くの避難者で足の踏み場もないほどだった。外に段ボールで風よけを作り過ごしている人もいた。他県からのボランティアや、休校中の子供達が支援物資の配給等に活躍していた。家の片付け中にガラスの破片で足を怪我してしまったが、自衛隊の方に手当してもらったのもこの場所である。

食料の配給、自衛隊による給水、風呂サービスなどの情報は、近所の方から教えてもらった。避難所での情報は張り紙でされていることが多く、弱視の私には情報が入って来なかつた。町内放送設備が故障していたため、緊急に開局された益城役場のFM放送が貴重な情報源となった。LINEで情報が広がっていたようだが、私はフィーチャーフォンなので、近いうちにスマホの使用を検討している。

益城町住民のほとんどが被災者である。当然役場職員も被災している。その中の支援作業、本当に大変だったことだろうと感じている。

4 熊本県の被害状況

以下に県内の具体的な被害状況を記す。

道路：高速道路が一部崩れた。急ピッチで復旧がされ、架橋等は下から鉄骨で補強されている所もあり、それを見ると高速道路を走るのが怖いと感じた。一般道もいろいろな場所で段差ができたり陥没したりしている。多くの橋で道路との段差ができた。

阿蘇大橋：200mの橋は70m下の谷底に崩落し、周辺の道路と共に跡形も無い。

南阿蘇方面への主要な交通路が失われた。

熊本城：石垣が多くの場所で崩壊した。櫓も倒壊し無残な姿となった。天守閣の屋根には雑草も生えているが、夏には県民の被災者を勇気づけるためライトアップが

始まった。

熊本動植物園：ライオンが逃げ出したというデマが飛び交ったが、ライオンも地震が怖かったのか、おとなしく檻の中にいたようだ。多くの遊具が破損して休園中である。

商業施設：多くのショッピングモールやスーパーが大きく損壊し長期間の休業あるいは廃業に追い込まれた。本校からはほど近い健軍商店街内のサンリブ健軍店も倒壊した。

熊本市障害者福祉センター「希望荘」：内部が大きく破損しており使用できない。障害者関係の行事に大きな支障がでている。

学校：多くの学校でゴールデンウイーク明けまで臨時休校となった。休校明けの盲学校の鍼実習も、余震のため鍼をしばらく刺したまま刺激する治療法は見合わせることとした。

タクシー：被災地域では被災からしばらくの間、地震保険の審査のため多くのタクシーが貸し切られた。そのためタクシー不足となり、自動車の運転ができない視覚障がい者は移動に大変困ることとなった。

熊本地震の被害状況のまとめ

震災の直接死者 50 名 関連死 72 名 負傷者 2450 名

建物の損壊 17 万 2797 棟 (10 月 25 日現在)

4 月 17 日の避難者数 18 万 5 千

災害ゴミ推計 195 万 t

死傷者数だけをみると阪神淡路大震災や東日本第震災に比べ被害が少ないようにもみえるが、時間、季節がずれていれば大惨事になっていたことは想像に難くない。数百から千単位の死傷者が出了のではないかと感じている。発災の 1 週間程前まで寒かったので、その頃発生していたら暖房器具による火災が多発したのではないかだろうか。また、昼間であれば、高速道路では衝突事故、動植物園では子供達が遊具事故の犠牲に、多くの観光客が、熊本城で落石の下敷きに、阿蘇大橋で谷底に落ちていたかもしれない。ショッピングモールでも買い物客の犠牲者が出了かもしれない。

14 日の地震が前震と分かっていれば被害はもっと防げたのではないかと思う。前震で、避難した人が、家に帰り本震に合い 2 階の下敷きになって亡くなっているケースもあったからだ。

5 熊本地震における視覚障がい被災者への支援活動について

熊本震災では震災直後、阪神淡路や東日本の震災支援経験のある日本盲人福祉委員会の方々からの支援と盲学校休校という条件が重なり、また、本校校長の理解もあって、地域支援部や理療科の職員が中心となり視覚障がい被災者支援に取り組むことができた。

県下の視覚障がい者被災状況は、支援対象者数約 2000、全壊 20、大規模半壊 25、半壊 135、一部損壊 215(推計)であった。

避難時にみられたこと

- ・ケース A 音声対応携帯に苦情が出た。

避難所で音声対応携帯を操作していたところ周りから「うるさい」と苦情が出た。またラジオを聞いていてそれを止めさせられたケースもあった。

- ・ケース B 避難所の混雑による難しさ。

全盲女性、避難所で横になる際、家族から「足を伸ばすと隣の人に当たるよ」と注意されるほどの混雑であった。通路のスペースもなくトイレに移動するのにも大きな支障があった。水分補給を我慢し体調を壊す。

- ・ケース C 昼間は家族がいなくなる。

家族と避難した男性。夜は息子さんが一緒だが、昼は仕事のため支援者がいなくなり、配給、トイレ移動等に困った。

- ・ケース D 補聴器の特殊電池が切れた。

補聴器を使用している女性。避難所での生活が始まって間もなく補聴器の電池が切れた。特殊な電池のため避難所で入手することができなかった。このケースでは、緊急支援として補聴器用の電池を渡すことができた。

- ・ケース E パソコンを使っていたら、視覚に障がいがないのではと誤解を受けた。

弱視の男性。視力の低下に加え強度の視野狭窄があり歩行に不自由している。避難所ではトイレの近くに居住の区画を割り当ててもらった。トイレまでの導線に見やすい色の誘導テープを貼ってもらうなど支援を受けていた。しかし中心の視野でパソコンを見ることができるため、周囲の人から「あの人は見えているじゃないか」「見えているのに特別な扱いを受けている」と誤解を受けた。

- ・ケース F 避難所運営に東日本震災の支援経験が生きた。

ある中学校に設置された避難所。東日本大震災で支援経験のある学校職員が運営に関わっていた。中学生をボランティアとして機動的に活用し、スムーズな運営が成された。食事の配給も区画を分け順番に配分し、混乱が避けられた。高齢者や障がい者については並ぶのではなく、スタッフが運ぶという支援が行われた。

支援活動を行って感じた事

- ・障害者団体や点字図書館などの関連機関に登録していない人が多い。

- ・福祉サービスを何も利用していない人が多い。

- ・家族以外からの支援を遠慮する人がみられた。

- ・不審電話を警戒、こちらの支援も信用してもらえない。

- ・視力障がいだけでなく、他の疾患による困難、家族の疾患や介護等、課題が複雑に絡み合っているケースがみられた。

- ・高齢者が多くかった。

- ・電話支援の質問事項や記録様式に統一がなく、後日データ整理する際に必要な事項が確認できなかった。

今後の対策として望まれること

- ・行政に期待すること

実行可能な避難計画の作成：今回の被災では、自治体に要援護者登録をしていたにもかかわらず、発災直後、この仕組みによる行政からの支援は全く得られなかった。

福祉避難所の体制整備：今回の熊本地震では福祉避難所があまり有効に機能しなかった。

予め福祉避難所の指定を受けている施設が複数あったが、そこには普段その施設でデイサービスやショートステイを利用している人達が既に避難して来ていた、新たな受け入れは実際にはほとんどできなかった。このように入所施設等が追加で受け入れるのではなく、福祉センターや支援学校等が障がい者とその関係者等を受け入れる体制を作ることが必要だと感じた。

- ・地域に求められること

避難所への移動の声掛けや誘導、避難所での行動の支援、あるいは掲示物など視覚的に提供されている情報の伝達方法等の検討が望まれる。全てを行政に任せることは現実的ではないということが今回の被災でよく理解できた。緊急時に全ての人が「困った時はお互い様」の気持ちでお互いの支援ができるよう日頃からの取組が大切になると感じた。

- ・当事者団体等に求められること

地域の特性に応じた防災のあり方、当事者ならではの細かい提案や研修会の実施。又、電話支援に当たっての質問事項や記録についての書式の作成等が臨まれる。また、防災に役立つ日頃の情報提供や、点字図書館への登録者数の拡大なども行う必要がある。

- ・個人でできること

具体的対策としては、家屋の耐震診断や改修(特に1981年、昭和56年以前に建築された住宅)、家具の固定、非常用持出袋(ラジオとイヤホン、弱視はルーペ、単眼鏡)の準備、食料・飲料水の備蓄(3日分)、カセットコンロの準備等が考えられる。

熊本地震支援に関するその後の状況

発災から約1ヶ月の5月15日、日盲委の支援を引き継いで「熊本地震視覚障害被災者支援特別委員会」が立ち上げられた。構成員は、日盲委、視覚障害者団体、盲学校関係者、眼科医関係者等である。これまであまり連携することがなかったこれらの組織がこれを機会として連携を深めることになった。被災は残念なことであるがそのことによって始まった連携をしっかりと生かしていくなければならない。

執筆時点では緊急支援のニーズはほぼ無くなってきたが、被災による転居や、歩行環境の変化に伴う歩行訓練のニーズはまだまだこれから出てくるものと思われる。そのような状況の中、タイミング良く県視覚障害者福祉協会に歩行訓練士が配置された。27年度までは盲学校の職員だったという貴重な人材であり、今後の活躍に期待しているところである。



熊本地震により 1 階部分が押しつぶされた家(左)と完全に倒壊した民家(右)

6 現在の益城町

地震回数、4110 回、人口は、同年 3 月と比べて、千人以上約 500 世帯が減少している。公費解体も、現在 20% 程度しか行われていない(10 月 14 日現在)。仮設住宅 17 カ所、1556 戸が建設され、最後の避難所、益城総合体育館が閉鎖されたのは、10 月末のことであった。空家やビニールシートを張った家、公費解体を待つ家はまだまだ多く、夜道は暗くて寂しい。

仮設の上水管は地上を走り、下水管は 30~50 km 破損している。又、町全体が 50 cm から 1 m の地盤沈下を起こしているとのことである。

路線バスは益城の入り口までしか運航しておらず、小中学校においては給食センターの損壊で学校給食を調理することができず、長期間に渡って業者の弁当を食べることになった。

震災前まで利用していた近くのスーパーが閉店しており、買い物に 3 km 程歩かねばならない。

被害は不平等である。全壊、半壊、無傷の家が並んで建っている。地盤が沈下して傾き住めないが、家は無傷なので保険が出ないケースもある。このような難しさが復興の妨げになっているようだ。

私自信、今だに歩いていると、揺れている感じがし、まっ直ぐ歩けなかったり、トイレに入る度に揺れているような感じがしたりすることがある。

7 おわりに

熊本ゆかりの文豪、夏目漱石の言葉に次のようなものがある。

「世の中は苦にすると何でも苦になる。苦にせぬと大概の事は平氣でいられる」

人は、「最悪の環境の元でも、楽しみを見いだせる唯一の種族」だそうだ。私も、少しでもポジティブに過ごすため楽しみを探した。日本各地から集まっている支援車両のナンバープレートを見つけ、仲間と「今日は、〇〇県の車を見た」と報告しあった。小豆島消防局の救急車を見たときは本当に驚いた。炊き出しも楽しみで、この年になって初めてタコスを食べた。近所の方々とのつながりも深くなり、震災 1 ヶ月後、遅くまでバーベキューを楽しんだことは、震災が起きて唯一良かった事である。

くまモンの生みの親、小山薰堂さんからのメッセージを記す。

「百年後の未来を想像して見てください。あの地震があったからこそ熊本県民の強さは磨かれ、感謝上手になり、誰からも頼られ愛される今の県民性を築くことができたよね！」

益城町は、「益城町復興計画骨子」を作成、復興への道のりを歩み出した。災害に強い町、他の被災地を援助できる町を目指すのである。

私も、日本全国からの支援に感謝しつつ、復興への道のりを私なりに歩いて行きたいと思っている。

参考資料 熊本日日新聞 朝刊

熊本地震特別写真集(熊日発行)

広報ましき 10月号

4 熊本地震に関するアンケート結果（寄宿舎）

1 地震時の状況

- 21:26 地震発生（震源：熊本地方、M6.5、震度6弱）
寄宿舎生10人（小5人、中1人、高1人、成人3人）寄宿舎指導員3人、舍監1人。舍監、宿直者で舍生の安全と避難経路を確認し、マニュアル通りではなかったが、揺れが大きかったため、避難開始。
*全館放送を使おうとしたが、放送機器が反応しなかったため、口頭やジェスチャーで避難開始。
*地震の震動で防火扉が閉まっている箇所があった。
- 21:36 全員が運動場に避難完了。
*管理職への電話がつながらず、ショートメールで報告を行った。
*寮務主任がたまたま学校に残っており、すぐに駆けつけてくれたため、素早い避難ができた。
- 21:40 避難後、点呼確認。余震の中グラウンド待機。
*余震の合間にテント、毛布、マット、ブルーシートなどや舍生の着替え、おむつ、薬などを室内へ取りに戻る。併せて、寄宿舎内のガス栓、電気、ブレーカーを切る。
- 22:40 隣接する聾学校より、第二高校（避難場所、学校から約500m）へ避難すると連絡があったが、管理職の判断で運動場待機を続ける。（理由①目が不自由なため、慣れない場所では不安があるだろう。理由②第二高校の体育館がピロティーのため心配である。
*動物園よりライオンが逃げたと誤報が入ったため、職員の車を運動場へ移動し舍生全員を車内へ避難させた。バギー使用の生徒は、バギーから下ろし、職員が抱きかかえて待機。
- 23:00 頃～勤務外の寄宿舎職員、学部職員が食べ物、飲み物を持参し、応援に駆け付けてくれた。
- 23:30 全舍生保護者へ無事に運動場に避難している旨を連絡する。
*舍生の一人が39℃の発熱、咳。水分補給、体温調節など個別に対応を行う。
- 24:00 応援職員より近隣の東区役所（学校から約500m）に避難スペースがあるとの情報を得て、教頭と共に全員で避難開始。
*バギー使用、ミキサー食対応の生徒は、運動場へ保護者がお迎えに来られた。
- 1:00 全員で東区役所3階へ避難。
*翌日（4/15）の休校が決定後、休校のお知らせとお迎えの依頼のため、全舍生保護者へ連絡を入れる。
- 2:00 舎生、数名を除きほぼ就寝する。
*避難経路の確認、寄宿舎浴槽へ水をためる。寄宿舎施錠や非常扉の確認を行う。
- 4月15日（金）休校
- 5:00 廉房の栄養教諭と連絡をとり、避難所での朝食の配給がある旨を伝える。
*厨房からもおにぎり、救給カレー、ゼリーを出して頂いた。
- 6:00 舎生、職員全員無事に朝を迎える。
- 7:00 舎生が起き始め、朝食を摂る。
- 7:30～ 舎生の保護者引き渡し開始。
*成人舍生1名、単独帰省を行う。（バスは通常運転していた）
- 8:20 宿直者を中心に舍生、保護者対応を行い、出勤してきた職員で寄宿舎の片づけを行った。
- 11:30 舎生全員、帰省完了。

2 避難時の問題点

- ・運動場に避難後、屋内は危険だと判断したにも関わらず、必要な物を取りに行ったり、施設・設備の確認をしたりするため何度も舍内に戻ったが、戻るべきではなかった。確実に安全確認が済んだ後に舍内に入るべきだった。
- ・食料・水やその他の備蓄が十分ではなかった。
→個人で非常持ち出しバッグの準備（水 500ml、雨合羽、保険証のコピー、かかとのある靴、マスク、2・3回分の食料、必要に応じて薬、オムツ、着替えなど）をした。救急バッグ、個人の非常持ち出しバッグや支援物資でいただいた毛布は、すぐに取り出せるよう寄宿舎建物の外に保管している。
- ・ポータブルトイレの備蓄がなかったため、一次避難後、職員が付き添い舍内のトイレを使用した。→現在は、備蓄あり。

3 保護者との連絡はスムーズに取れたか。

- ・電話での連絡はつながりにくく、ショートメールや LINE の方が連絡をとりやすかった。
保護者への連絡について、学校側からの情報発信に熊盲安心メールを活用し、保護者からの返信に関しては調整中。

4 勤務外の職員の対応

- ・22:05 に応援職員 2 名到着。その後も計 7 名もの応援職員が駆けつけた。食べ物や飲み物を持参した職員もいた。別動隊を作り避難場所の情報収集や避難場の確保、移動がスムーズにできた。

5 熊本地震を体験し、危機的な状況の中で一番に大切と感じた事は何か。

- ・命を守ることが第一。本震クラスの揺れ（6 強）を想定し、応援職員がかけつけられない前提で、宿直者 3 人と舍監 1 人の計 4 人で避難可能なマニュアルの作成及び訓練の実施。
- ・非常持ち出しバッグを個人で準備。持ち出し可能な場所や屋外に準備。
- ・備蓄品の充実。テント、コンパネ、食料、水、ビニールシート等の購入依頼中。
- ・避難所の確保。今回避難した避難所（東区役所）は、避難者が殺到する恐れもあるため、運動場を避難所として活用する方向で検討中。